



## つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 267号 2011.2.20 発行 社会政策研究所

=====

2月8日から19日まで毎日新聞朝刊にて「時代を駆ける」(ナミねえ編)が9回にわたって連載されました。【kobi】



時代を駆ける：竹中ナミ / 1 障害はマイナスじゃない

毎日新聞 2011年2月8日

NAMI TAKENAKA

ずらりと並ぶパソコンに車椅子の人らが黙々と向かう。神戸市東灘区のビルの一室。竹中ナミさん(62)が、ITでチャレンジド(障害者)の自立や就労を支援する組織を仲間と設立して20年になる。パソコン講座やメール相談などを利用し、プログラマーなどとして活躍する人はこれまでに500人以上。愛称「ナミねえ」の目標は「チャレンジドをタックスペイヤー(納税者)にできる日本」だ。

チャレンジドという言葉は神から挑戦の機会を与えられた人々という意味で、アメリカで使われています。日本にはそういう考え方はなかった。言葉というのは哲学であり思想であり文化。だからすごく大切。障害者というネガティブな言葉で呼ばれなくなり、チャレンジドという自覚を持ったことで、前向きに生きられるようになった人をたくさん見えました。



たけなか・なみ 社会福祉法人「プロップ・ステーション」理事長。1948年10月8日、神戸市生まれ。政府の委員も多数務め、昨年6月からはNHK経営委員。ボーカルとしてバンド活動も続けている

《チャレンジドという発想の契機は、脳に重い障害がある長女麻紀さん(38)の誕生だった》

育て方について、どの医者も答えを持っていませんでした。「お母さんのせいじゃないから、がっかりしないで」って言うばかり。その時、パッとひらめいたんです。「障害のことは障害がある当事者に聞けばいいやん」って。目の見えない人のところに行って、「見えないけど何が楽しいの」って。普通は失礼でそういうアプローチはしませんよね。でも、私は15歳で高校を除籍になって家出をした不良やったから、教えてもらおうと素直に思えたんです。

《懐に飛び込んだら、障害がある人が他の感覚を研ぎ澄ましてカバーしていることが分

かった》

本当はいろんなことができるのに、障害っていうだけで、端っこにいるマイナスな人と思われたり、可哀そうとか言われているのは絶対におかしいと。重要なのは見えない人が見えるようになることではなくて、見えなくても見える人と同じように物事が楽しめたり、仕事ができること。その人のできることを増やしていくことが、社会のやるべきことなんです。

=====

聞き手・近藤諭 写真・大西岳彦 / 今週は火～金曜日掲載です

#### 人物略歴 たけなか・なみ

社会福祉法人「プロップ・ステーション」理事長。1948年10月8日、神戸市生まれ。政府の委員も多数務め、昨年6月からはNHK経営委員。ボーカルとしてバンド活動も続けている

#### 時代を駆ける：竹中ナミ / 2 15歳で同居、16で結婚

毎日新聞 2011年2月9日

#### NAMI TAKENAKA

ひたすらやんちゃな子どもでした。木に登って枝から枝に飛び移ったり。中学の時に神戸の漁師町から山の手へ引っ越したんですが、転校先の学校で「不良の女が来る」ってうわさになってました。私はただのやんちゃやったんやけど、不良のレッテルを貼られたらと、授業を抜け出して校舎の裏でたばこを吸ったりしていました。

《勉強はあまりしなかったが、夢はあった》



たけなか・なみ チャレンジド（障害者）の就労支援に取り組む社会福祉法人「プロップ・ステーション」理事長。62歳（写真は高校1年の頃＝本人提供）

一番なりたかったのは漫画家。手塚治虫さんが大好きでした。中学生の時、その手塚さんと漫画家の小島功さんが学校長という日本初の通信制漫画塾ができて、早速受講したの。すぐに漫画を描かせてもらえんと思ってたんやけど、デッサンばかり。3カ月で挫折しました。

「あんたはやったらできる子や」と母に励まされ、志望の公立高校に合格。「コネで入った」とか周囲には言われましたけど、成績の良かった2歳下の弟に猛特訓してもらったんです。

《高校に受かったが「まじめに勉強」とはいかなかった》

勉強がしたくて高校に行ったわけじゃないから、すぐに授業をサボりました。夏休みには職業安定所で母が選んだ役所の選挙人名簿整理のアルバイト。退屈極まりなくて、アメを食べたりしてサボってました。すると、アルバイトをまとめるお兄さんに「仕事にその態度はなんや」と怒られました。だけど、そのお兄さんがごっつい大人に見えて一目ぼれ。そのまま付き合っって同居しました。15歳でした。

《当時は高校生の男女が手をつないで歩いただけで不純異性交遊と言われた時代だ》

それは大騒動になりましたよ。学校の先生が実家に来て「お宅のお嬢さんのようなふしだらな生徒が学校にいたら困ります」と退学を宣告。さらに「お嬢さんでも通える女子校を探しました。100万円かかります」と提案され、両親が了承してしまったんです。頭に血が上って、「私に100万円も出したらドブに金を捨てるようなもんや」と言い捨てて家を飛び出しました。そのまま戻らず翌年、同居相手と16歳で結婚しました。

#### 時代を駆ける：竹中ナミ / 3 長女の脳に重い障害

毎日新聞 2011年2月10日

## NAMI TAKENAKA

兵庫県西宮市にあった文化住宅の4畳半一間で、16歳の新婚生活が始まりました。ちょうど阪神高速道路の真下にあって年中、騒音がしてましたね。貧乏だったけど、楽しかったです。結婚して5年後に長男宏晃が誕生しました。さらに3年後、24歳の時に長女の麻紀(まき)が生まれました。

《麻紀さんの誕生がその後の人生を大きく変えることになった》

実家近くの助産師さんのところで出産しました。少し低体重だったんですが、病院に搬送するほどでもありませんでした。だけど、すぐに産声を上げず、おっぱいに吸い付く力もない。助産師さんは「ちっちゃく産んで大きく育てたらいい。大丈夫や」と言ってくれましたが、体もぐにゃつとして、声もか細いんです。3カ月健診で「脳に重い障害がある」と言われました。大変なことを言っているなと思ったけど、実感は全然ありませんでした。

《麻紀さんの誕生を機に両親とも和解。両親も麻紀さんをすごくかわいがっていた》



(写真は昨年11月、兵庫県内で撮影。20歳から重度心身障害で入院中の麻紀さん<左>と=竹中さん提供)

どないしたらいいもんかと思い、両親のところへ相談に行ったんです。すると父がいきなり私から麻紀をひったくりました。そしてブルブル震えながら真っ青な顔でこう叫んだんです。「ワシが麻紀を連れて死んだら。こういう子を育てたら、おまえが大変な目にあって不幸になる」。父は私を溺愛し、いつも穏やかな

人やったけど、その時は普段の様子とは全く違いました。このままでは本当に死ぬやろうなと思った私は「幸せか不幸かは私が決める。私は絶対に、元気で楽しく幸せに暮らしてみせる」と言って父を安心させました。

《育て方を知るために医者巡りが始まった》

障害者施設を利用したり、訓練所に通うためには障害者手帳が必要で、手帳をもらうためには診断書が要りました。お医者さんは麻紀をどう診断したらいいものか悩んでいましたけど、最終的には「侏儒(しゅじゅ)症」(小人(こびと)症)ということになりました。体幹は普通なんですが手足が小さいので、それでいいだろうと判断したようです。でも、育て方は、お医者さんでは分からないままでした。

## 時代を駆ける：竹中ナミ / 4 障害者に苦楽を尋ねる

毎日新聞 2011年2月11日

## NAMI TAKENAKA

娘の麻紀の目は光を感じることができる程度で、音にも反応するけど、どんな音かは分かっていないようでした。それならと、目の見えない人や耳の聞こえない人たちに何が困るのかというマイナス面と、どういう工夫をしたら楽しく過ごせるのかというプラス面の両方を聞きに行きました。

《障害者から教わるという姿勢が通じ、夢や希望、不平不満などいろんな思いを話してくれた》

子育てをしている視覚障害のご夫婦と親しくなっただけですけど、頭の中に地図があって、家のどこに何があるかをすべて把握していました。さらに、赤ちゃんが熱を出してないか、虫に刺されてないかということも常に体を触ってるから分かるというんですね。これには驚きました。

《能力があるのに、そうは思われていない》

「連れて死ぬ」って父に言わせた原因もこういうところにあるのかなと分かりました。

《麻紀さんが4歳の時に兵庫県西宮市北部の夫の実家に引っ越した》

20軒くらいの静かな集落で、麻紀が泣き叫ぶと響き渡るくらいでした。家の裏にはダムがあり、散歩に最適な土手の上に通じる獣道を麻紀の乳母車を押しながらよく通りました。ある日、その道に鉄条網が張られていました。お義母（かあ）さんに聞くと、顔役のおばあさんが「そんな子は通ってほしくない」と言って取り付けたそうです。

《古いしきたりの残る田舎で、麻紀さんのことを理解してもらうのは容易ではなかった》

私はよそ者だからこういうことをされる。それならこの人間になってやろうと思いました。集落では月1回、観音様を祭るお堂に集まって、御詠歌を歌いながら大きな数珠を繰ったりするんですね。私も大切に思ってますよと知らせることが必要だと考えました。

千羽鶴を折り、観音様の新しい座布団をこしらえ、鈴ひもを紅白の新しいものに替えました。すると鉄条網を取り払い、「麻紀ちゃんに」と白菜やお餅も持ってきてくれたんです。自分が大切にしているものを侵さないと分かれば、人は心を開いてくれると改めて実感しました。

## 時代を駆ける：竹中ナミ / 5 対価は障害に関係ない

毎日新聞 2011年2月15日

### NAMI TAKENAKA

娘の麻紀が養護学校に通い始めると、障害者の通所施設でボランティアをしたり、いろんな活動に参加するようになりました。そこで「アテンダント」という言葉を知り、視界が開けました。「有料の介助者」という意味です。それを使って活動する車椅子の人と出会い、障害のある人が社会参加するために必要な考え方だと思いました。

《アテンダントの普及を目指す「メインストリーム協会」(兵庫県西宮市)の事務局長を務め、その就労支援部門として91年「プロップ・ステーション」が設立された》



(写真は94年ごろ大阪市内で、技能講習を受けるチャレンジド<手前>を見守る=竹中さん<左>提供)

創設メンバーは4人。うち1人はスポーツ事故で首から下の自由を失っていましたが、わずかし動かぬ指でパソコンを使い、実家のマンションを運営してるんですね。彼はパソコンを駆使することで、かわいそうな障害者じゃなくて経営者になったんです。全国のチャレンジド(障害者)へのアンケートでも「就労のための武器はコンピューター」という回答が多く、「これや」と思いました。

《92年に大阪へ移し本格的に始動。机一つ、受講者は4、5人だった》

ある重度の脳性まひのチャレンジドはパソコンでデザインした絵が初めてお金になった時、「ナミねえ、お金って公平なもんやったんですね」って言った。その言葉が忘れられない。社会で認められる仕事をすれば、障害に関係なく対価を受け取れるんですよ。

《活動する中で、人脈が広がった》

パソコンなど必要な道具は私たちの考えを理解してもらった企業からも提供を受けました。技能講習の講師も計約30人いましたが、みんなボランティア。IT業界がベンチャーだった時代なので、若手のトップクラスの人たちとお付き合いすることもできました。

《98年に「プロップ」が社会福祉法人化する時にも支えられた》

法人化しなければ大きな仕事はもらえない。だけど1億円の基金が必要でした。どうしようと悩んでいた時、マイクロソフトの日本法人社長だった成毛眞(なるけまこと)さんがすぐに寄付してくれたんです。あれがなければ今のプロップは存在しません。

## 時代を駆ける：竹中ナミ / 6 震災契機にまた成長



毎日新聞 2011年2月16日

## NAMI TAKENAKA

「プロップ・ステーション」の活動がこれからという時に阪神大震災（95年）が起きました。私は大阪の事務所にて無事でしたが、神戸の両親に電話がつながりません。テレビを見ると街は燃えてるし、高速は倒れてる。頭が真っ白になりました。すると昼ごろに母から電話があって「家が全部焼けた。これから逃げるところ探す」って。とにかく両親が無事だと分かって安心しました。

電気や通信回線が復旧すると、プロップのメンバーやチャレンジド（障害者）からも「僕は生きてる」などの連絡が入ってきました。幸い大きなけがもありませんでした。

「プロップステーション」でのセミナーで受講生と話す竹中ナミさん（中央）＝神戸市東灘区で2011年1月27日、大西岳彦撮影



### 《震災ではITを使った支援でチャレンジドが活躍した》

どこでお弁当をもらえとか、車椅子でお湯を使える場所とか、生活情報などをパソコンでやりとりするようになりました。ボランティアを登録するデータベースも作ってもらいました。情報通信が人と人をつなぎ、支え合うことに役立つやと確信しましたね。

今ではパソコンを使ったボランティアは確立してるけど、日本初のパソコンボランティアは、被災地にいたチャレンジド自身の活動から始まったんです。

### 《ボランティア元年と言われた震災で、官に頼っていた人々の考え方が変わった》

それまでは社会の公的な部分は官がするもんやとなっていた。それが震災では官も民も関係なく被災者になってしまった。一人一人の障害者がどこにいてるかなんて役所は把握していなかったんです。だから地域のみんなで助け合なあかん、ということを経験に教えてもらった。チャレンジドは何も障害者だけを指すんじゃなくて、震災復興など課題に向き合う人もそうなんですよ。

### 《震災後、国のいろいろな委員に呼ばれるようになった》

私に声が掛かったのは、社会福祉法人の理事長だったことも大きいと思います。けど、それよりも、震災で草の根運動みたいなものが社会を支える重要なファクターになる、行政システムに民を巻き込まないとだめだ、ということが分かり始めたからやと思います。

## 時代を駆ける：竹中ナミ / 7 菓子作りのプロも養成

毎日新聞 2011年2月17日

## NAMI TAKENAKA

旧労働省の委員として米国で国際会議を視察した99年、「チャレンジド（障害者）のテレワーク」という分科会の講師だったダイナー・コーエンさんと出会ったんです。国防総省コンピューター電子調整プログラム（CAP）の理事長。

なぜチャレンジド支援を国防総省が？ 「全ての国民が誇りを持って生きられるようにすることが国防の第一歩でしょ」との彼女の言葉に共感できました。

### 《コーエンさんとは今も交流が続いている》

たけなか・なみ 社会福祉法人理事長。62歳（写真は米国大使館で「勇気ある日本女性賞」を受賞、臨時代理大使〈右〉が祝福＝竹中さん〈中央〉提供）



「チャレンジドを納税者にできる日本」を掲げるプロ

ップ・ステーションとC A Pは活動の根っこが同じ。だから、日本で開いた国際会議で彼女に何度も講演してもらいました。「日本のナミねえはカウンターパート（対等の相手）」と、今も情報を提供してくれます。

《東京の米大使館から09年、初の「勇気ある日本女性賞」を贈られた》

私がアメリカの良心やと感じたC A Pと組んでやってきたことを評価してくれた。改めて、プロップの考え方を日本中に広めたいと強く思ったんです。「自信持ってやりや」と背中を押してくれた賞でした。

《I T以外にも活動の幅が広がってきた》

チャレンジドの潜在的な力を引き出すものなら何でもやりたい。08年から、お菓子作りのプロを養成するプロジェクト「神戸スイーツ・コンソーシアム」を始めました。講演先で日清製粉の社員の方が「何か一緒にやれないか」と声を掛けてくれたのがきっかけです。神戸はスイーツの聖地やし、それでいこうと。

《多くの人たちが協力してくれた》

統括講師は洋菓子店「モロゾフ」テクニカルディレクターの八木淳司さん。息子さんが養護学校に通われていて、自分ができる社会的活動はないかと思っていたそうです。「これは自分がすべきこと」とボランティアで引き受けてくれました。

神戸にある日清製粉の工場の調理場を無償で借り、社員総出で手伝ってくれています。バターやミルクなどのメーカーも無償で材料を提供してくれます。おかげでこれまでに30人以上が修了し、今後の活躍が楽しみです。

## 時代を駆ける：竹中ナミ / 8 出会いに恵まれた

毎日新聞 2011年2月18日

### NAMI TAKENAKA

社会の制度を変えるためには、やっぱり国が変わらないとだめだと気づいて、霞が関行脚が始まりました。それぞれの組織の内部につながる人間関係を作るのが目的です。ケンカするより理解者を増やしていくのが「ナミねえ流」です。

《旧労働省では郵便不正事件で無罪になった村木厚子さんと出会った》

女性やチャレンジド（障害者）が働ける社会というのが厚子さん自身のテーマでもあったんです。仕事に誇りを持っていた。だから逮捕されたと聞いた時は「100%あり得ない」と思いました。チャレンジドの力も借りて「村木厚子さんの完全な名誉回復を願うサイト」を開設し、支援を始めました。裁判も毎回傍聴して明け方までかかってブログで内容を報告しました。

《人柄を知る人は無罪を信じていた》

兵庫県丹波市の大平さん宅を訪ねた竹中さん（右）と長女麻紀さん＝本人提供



勾留中に彼女に接見したら、「ナミねえ、麦飯って結構いけるわよ」って。ふわっとした雰囲気のまま、励まそうとして逆に励まされたり。あんな状況でも女性刑務官の労働状況などを気にするような人なんです。

《サイトの開設には、共通の友人で元大阪市助役の弁護士、大平光代さんも関わった》

助役時代からの付き合いです。極道の妻から弁護士になって壮絶な人生なんですけど、その彼女が06年に出産しました。今から分娩（ぶんべん）室に入るといってまでメールのやりとりをしてたのに、その後なかなか連絡が来なかったの。みっちゃん（大平さん）の出産は、帝王切開やったから心配で。3日後に連絡が来ました。「ナミねえ、女の子やってん。それでな、ダウン症やってん」

私は日ごろ子どもに障害があっても大丈夫とか言ってるのに、その時は絶句してしまっ

て「おめでとう」の一言が出なかった。でも、みっちゃんが「心配いらんで。ナミねえの世界に行くだけやし、これからもよろしくね」って明るく言ってくれたんです。

《どんな状況でもお互いを思いやれる強い信頼関係で結ばれている》

厚子さんもみっちゃんも心から親友と呼べる人。私は出会いには恵まれてると改めて思います。

時代を駆ける：竹中ナミ / 9 止 母は安心して死にたい

毎日新聞 2011年2月19日

### NAMI TAKENAKA

公共放送に民間で活動している自分たちの声が届けばと思い、昨年からはNHK経営委員を務めています。会長選でのごたごたがあったと言われますが、視聴者の目線でNHKがどうあるべきかを真剣に考えた結果です。

NHKの放送技術研究所を見学したんですが、リアルタイムの字幕や音声放送など、世界に冠たる放送技術を持っているんだと知りました。公共放送が率先してユニバーサル化を推し進めてくれるように、委員の立場から提言していきます。

《仕事以外でも月1回のペースでバンドライブを続ける》

「ナミねえBAND」としてプロのミュージシャンをバックに歌っています。父の十三回忌の法事でもライブをやったんですよ。私の歌声に（長女の）麻紀が笑顔を見せてくれるのがうれしくて、歌にはまったんです。

《重度の心身障害がある麻紀さんは38歳の今も少しずつ成長している》

昔は体を触るとすぐに嫌がって叫んでたけど、小学校くらいで自分から体を寄せてくるようになった。おんぶの時、足を腰に巻き付けるようになったのが養護学校の高等部を卒業する頃で、肩に手を回せるようになったのが30歳になってから。最近手は握り返してくれるようにもなりました。ゆっくりなんだけど彼女なりの成長を遂げている。これがどんなにいいおしいかは言葉にできません。

《我が子は宝物であり、恩師でもある》

麻紀のおかげで、社会っていろんなスピードで生きる人でできてるんやと気づくことができた。（障害者支援の）「プロップ・ステーション」の活動を通じてたくさんの人と出会い、好きな歌までやらせてもらって、ほんまにラッキーです。

《これからも母として社会を変えていく》

私のやってることは、要は、娘を残して安心して死にたいというオカンのわがままです。チャレンジド（障害者）が働けるようになって、娘を支えてくれる人が10人でも100人でも増やせたらオッケー。そういう社会は、たくさんの方が誇りを持てるんだろうなと思うんです。

たまには太陽の子・手をつなく、たまにはつなくちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町 5-33 社会福祉法人大阪手をつなく育成会 社会政策研究所発行